



岩手県立中央病院

ふれあい



2017年8月1日 盛岡さんさ踊り
撮影：盛岡赤十字病院 門間信博先生

基本理念

高度急性期医療を推進する県民に信頼される親切であたたかい病院

目次

病理診断（病理検査）とは 千の風にこたえて —「岩手県立中央病院上田移転30周年記念誌—30年の軌跡、あらたな歩みのために— へりポート整備 健康講座「肝炎の最近の話題」より	副院長 佐熊 勉 …… 2 統括副院長 野崎 英二 …… 3
第16期医師事務作業補助者コース研修会に参加して さんさ踊りを終えて 糖尿病治療はみんなで!! 編集後記	救急医療科長 須原 誠 …… 4 消化器内科医長 城戸 治 …… 5 栄養管理科 松本 佳代子 …… 5 医療クラーク 佐藤 有文子 …… 6 病理診断センター・臨床検査技術科 高橋 一博 …… 7 総合診療科医長 橋本 朋子 …… 8 広報委員長 島岡 理 …… 8

【行動指針】

1. 良質な医療の提供
2. 優れた医療人の育成
3. 地域医療機関への診療支援
4. 救急医療の充実
5. 災害医療の体制整備
6. 臨床研修体制の充実
7. 健全で効率的な病院経営

※広報誌「ふれあい」は1,800部を作成し、県民、連携医療機関、行政機関等に岩手県立中央病院の情報をお届けしています。

病理診断とは？

患者さんの体から採取された細胞や組織を使って顕微鏡で観察するための標本が作られます。ガラスに薄く広げられ、染色された標本を顕微鏡で観察して診断するのが病理診断です。

病理診断は、それがどのような病変か、良性か悪性か、どれくらい進行しているか、治療が必要かなどについて明らかにし、患者さんの治療方針の決定に役立てられます。普段、病理医は患者さんと直接お会いすることはありませんが、病理診断という形で診療に大きく関わっています。

病理診断の種類は？

病理診断は様々な状況で必要とされます。その方法を以下に説明します。

1. 細胞診断（細胞診）

病変の細胞を顕微鏡で観察する方法です。採取方法によって塗抹細胞診、穿刺吸引細胞診、擦過細胞診の種類があります。塗抹細胞診は喀痰や胸水、尿などに含まれるがん細胞などを観察します。穿刺吸引細胞診は乳腺などの腫瘍（しこり）に細い針を刺して採取された細胞を観察します。擦過細胞診は病変から綿棒やブラシで細胞を擦（こす）り取って検査する方法で、婦人科細胞診はこの方法が主流です。

2. 組織診断

検体の採取方法によって生検組織診断と手術摘出検体の組織診断があります。生検組織診断は病変の一部を標本にして観察しますが、胃、大腸、肺、乳腺、皮膚、リンパ節や婦人科、泌尿器科領域など多くの組織が対象となります。手術で取り出された検体の組織診断では、がん病変の広がりや悪性度、転移の有無などについて調べ、病理診断は手術後の治療方針決定に大きく関わってきます。

3. 術中迅速診断

病変が体の深いところにあるために術前に組織診断できなかった病変の病理診断、切除断端部のがんの有無やリンパ節転移を手術中に診断するものです。術中迅速診断は、標本を作製し、15分前後で病理診断を手術室の執刀医に報告します。

4. 分子標的治療薬に関わる診断

近年は種々の分子標的治療薬が開発され、その有効性、適応をみるために組織検査が必要とされています。乳癌ではハーセプチンという分子標的治療薬の有効性を判定する組織検査がありますが、肺癌、悪性リンパ腫、大腸癌などの分子標的治療薬も開発され、必要な組織検査が増えてきています。

5. 病理解剖

病気で亡くなった患者さんの遺体を解剖するのが病理解剖です。生前の診断が正しかったか、病気の進行の状態、治療の効果、死因は何かなどを明らかにするために主治医が遺族にお願いして解剖の承諾をもらいます。病理医は主治医の依頼によって病理解剖を行います。病理解剖は、医師や医療従事者の教育、知見の蓄積による医学研究など、他の方法では得がたい医療への貢献につながります。

病理標本の作製過程には機械化が進んできたとは言え、高度な技術を要する多くの手作業があります。特殊染色や免疫染色の種類も多く複雑な面もありますが、標本作製を行う臨床検査技師と病理診断を行う病理医が協力しながら、精度の高い病理診断を心掛けています。



千の風にこたえて

「岩手県立中央病院上田移転 30 周年記念誌 —30 年の軌跡、あらたな歩みのために—」のご紹介

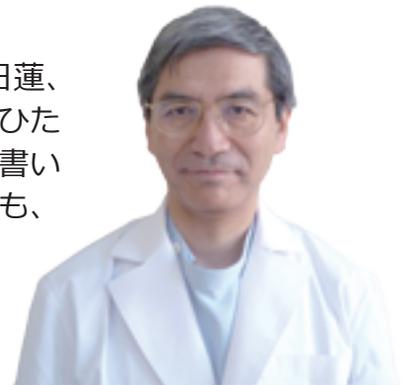
統括副院長 野崎 英二

自分の足跡を残すことを拒否した巨人がいました。鎌倉時代に「東に日蓮、西に一遍」といわれたあの一遍上人です。衣食住全て捨てながら、ただひたすらに念仏をとなえ全国行脚し捨聖といわれました。死の直前に自分の書いたものも焼かせたという話です。しかし、その足跡は何世紀を経てからも、人々によって拾い集められ続けています。

中央病院院長室の隣の応接室に、哲学者、梅原猛の書が掲げられています。「あなたのすぐ隣に仏さんがいるではないか」とあります。実はこの書は、この長命な時代に 75 歳で鬼籍に入った樋口紘元院長の自宅にあった書です。樋口先生は個人崇拜を嫌い、自分のためだけの会は行いませんでした。中央病院に対する多くの貢献も、彼の言葉を借りれば「職員達を忙しくさせて申し訳なかった」ということになり、ことさら威張ることなく忘れ去られようとしています。

はかない運命にあるのに、綿々と歴史を紡ぐ無駄な努力をおこなう一般人達の、少しでも残したいという思いがこの 30 周年記念誌です。「やめなさい」と千の風に言われたら、「あなたのために創るのではありません。30 年を支えた一人一人の職員のために創るのです。」と言い訳をしたいと思います。

「岩手県立中央病院上田移転 30 周年記念誌 —30 年の軌跡、あらたな歩みのために—」の「目次」を示すことで紹介とします。編纂途中ですので、最終 version と異なる可能性をお許しください。



目次

1. 御挨拶 望月泉 記念誌作成実行委員会委員長
2. 私の時代と次世代へのメッセージ・・・歴代院長の言葉
3. 歴代の総看護師長・看護部長の写真と一言（私の看護）
4. 歴代の事務局長の写真と一言（私の苦労）
5. 歴代の各診療科長、薬剤部長、放射線技師長、検査技師長の名簿
6. 年表
7. 写真で綴る主なできごと
上田移転、第 43 回日本病院学会、経営改革運動、第 42 回全国自治体病院学会、第 1 回岩手県立病院総合学会、配管改修事業と新棟建設、東日本大震災・津波、第 15 回日本医療マネジメント学会、第 66 回日本病院学会、岩手県立中央病院の本、第 6 回岩手県立病院総合学会
8. 次世代におくる 30 年の教訓
9. 各種機能評価証： 病院機能評価、研修機能評価、救急機能評価
10. 叙勲 賞状
11. 学術論文の歴史（英文誌のみ、当院医師が第一、二筆者のみ）
12. 30 年の重み、あとがきに添えて

ヘリポート整備 救急医療科長 須原 誠

(2019年、ある夏の午後。中央病院救急センター)

N崎医師は、その日救急当番ではなかったが、傷病者がたくさん来院していたため救急室(ER)を手伝うことになった。ちょうどERに着いた時だった。

「防災ヘリ『ひめかみ』、あと15分でヘリポート到着のようです」

盛岡消防通信指令室から連絡を受けたERスタッフが周りのスタッフに伝えた。

岩手山麓で遭難した傷病者の収容依頼はすでに連絡が来ていた。そのころドクターヘリは沿岸地域からの患者搬送に出動していたため、防災ヘリが対応、直接中央病院搬送になった。どうやら熱中症らしい。

その直後、たまたま開けられた救急患者搬入口のほうからヘリの飛行音が聞こえた。

「あれ、もうついたのかな？今、連絡 受けたばかりなのに」N崎医師は怪訝そうにつぶやいた。

「あれは防災ヘリじゃありません。EC135の音、ドクターヘリのほうです」救急ナースT中がにべもなく言い放った。EC135とは、岩手県のドクターヘリで使用されているヘリの機種名である。彼女は飛行音でヘリの機種を判別することができるのだ。

確かに5分ほど前に別の連絡がERの医療無線にあった。

「いわてドクターヘリから中央病院ER、こちらの感明いかがでしょうか？」

「いわてドクターヘリ、こちらは中央病院ERです。そちらの感明、良好です。こちらの感明いかがでしょうか？」救急ナースK池が、慎重に返答した。

「中央病院ER、そちらの感明も良好です。沿岸地域病院からの患者情報を送ります。意識は清明、血圧は110/80、脈拍90、SpO2は酸素6Lにて98%です」

その他、簡潔に情報が追加された。

「すでにヘリポートへは、引継ぎのスタッフが到着しています。冠動脈インターベンションも準備ができています」ナースK池が追加した。急性心筋梗塞の患者らしい。ERからヘリポートまでは3分とかがからない。

「到着まであと5分程度です。よろしくお願ひします。以上、いわてドクターヘリ」

それからまもなくして、ドクターヘリ着陸。ヘリポートで引継ぎが行われすぐに、ヘリスタッフは次のミッションに備えるため離陸した。離陸の瞬間、ローターの風切音がここぞとばかりに力強く響いたが、機影はあっという間に小さくなり青空に吸い込まれていった。あたりに静寂がもどるヘリが視認できなくなったころ、傷病者はすでにERに搬入、治療が開始されていた。ヘリポートからERまで3分とかがからない。

傷病者がERに搬入されると、ほぼ入れ替わりのタイミングで、防災ヘリの迎えに別の救急スタッフがヘリポートへ向かった。

「そろそろ、防災ヘリの迎えにいきましょう」、急ぐ必要はない。

ヘリポートへは3分とかがからないのだ。

(この物語は一部事実にもとづいていますが、フィクションです)



2019年3月、中央病院ヘリポートの完成が予定されています。中央病院は年間6千台を超える救急車を受け入れていますが、盛岡近郊以遠からも多くの救急搬送があります。岩手県では2012年からドクターヘリ運航が開始され、当院への搬送も行われています。ヘリの効率的運用のためには受け入れ医療機関敷地内あるいは隣接にヘリポートが必要ですが、現在は2.2km離れた県警盛岡東署(地上10階建て)の屋上ヘリポートを使用。冬場は凍結で使えなくなるため約2.5km離れた県営野球場を使用しています。せっかくヘリの機動性を生かして搬送してもヘリポートから搬入医療機関まで、時間がかかっては効果が半減してしまいます。救命率向上、機能的予後改善(後遺症の軽減)のためには一刻も早い搬送が必要となります。

また、災害時などは防災ヘリ運用も重要な課題となります。

ヘリポート予定地周辺の住民の方々、関係機関と協議を重ねた結果、病院隣接の県立杜陵高校敷地の一部にヘリポート設置が決まりました。年間を通して迅速で安定的な救急搬送体制を確保するため、今後ともご理解とご協力をお願いいたします。

6月4日(日)に開催した第53回健康講座より抜粋してご報告します。

肝機能障害と食事

管理栄養士 松本 佳代子

アルコールが肝機能に影響することはよく知られていますが、非アルコール性脂肪肝炎（NASH）があることをご存知ですか？これは、過剰な飲酒歴がなくても起こる脂肪肝で、将来的に肝硬変や肝がんに行進しやすいことが知られています。原因となるのは肥満や2型糖尿病、脂質異常症、高血圧といった生活習慣病です。NASHの予防と治療のためにはバランスの良い食事が基本ですが、中でも、食物繊維が豊富な野菜や海藻を十分にとることは大切なポイントの一つです。食物繊維はよく噛まないと飲み込みにくい特徴があるため、満腹感を感じやすくなり、食べ過ぎを防ぐことができます。さらに、食べた食品のコレステロールを排泄する作用や血糖の上昇を穏やかにする作用があるため、NASHの原因となる脂質異常症や糖尿病の予防につながります。生野菜なら自分の手に両手1杯、加熱後の野菜なら片手1杯分が1食分の目安になります。

新鮮な野菜が沢山入る時期です。地元でとれた旬の野菜でNASHの予防に努めましょう。

肝 炎

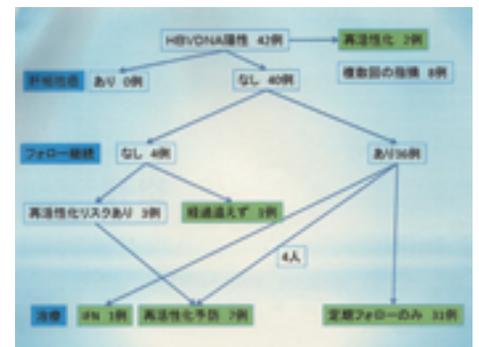
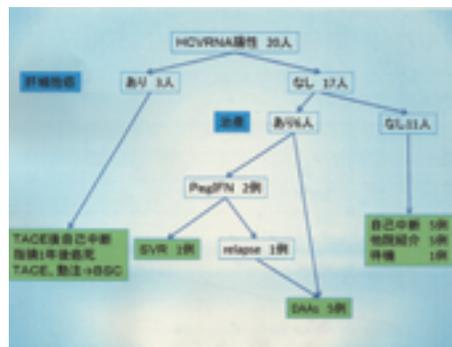
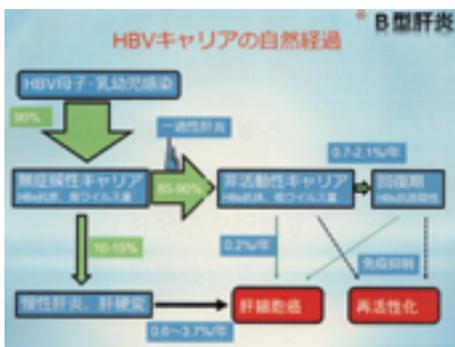
消化器内科医長 城戸 治

HBV 感染症の特徴 (B 型肝炎)

1. 持続感染する。
2. 慢性肝炎を惹起する。
3. 肝発癌を促進する。
4. 再活性化する。

HCV 感染症の特徴 (C 型肝炎)

1. 慢性化する。
2. 進行して肝硬変となる。
3. 肝発癌を来す。
4. ウイルス排除が可能。



次回の健康講座は、小児発達障害—予想以上に多い時代、どう対応するか—平成29年11月12日(日) 14時~16時30分 プラザおでつにて開催いたします。入場無料、事前登録不要です。多数のご参加をお待ちしております。



一般社団法人日本病院会の診療情報管理士教育委員会では、医師の事務作業を補助する従事者を養成するため「医師事務作業補助者コース」を設置し、「医師事務作業補助体制加算」を申請する際に必要な要件を満たした研修を実施しています。

去る、7月15日(土)、16日(日)の二日間にわたり、当院で研修会が開催されました。



「医師事務作業補助者?って誰?」という声が聞こえてきそうですが、当院では「医療クラーク」と呼ばれ、現在51名が外来を中心に各診療科に配置されております。

去る7月15～16日に上記研修会が当院大ホールにて開催されました。例年、東京、大阪、福岡の3都市のみで開催されておりましたが、昨年より地方都市でも開催されるようになり、本年、望月院長が当院での開催を計画してくださいました。これは、当院の医療クラークにとっては願ってもない研修の機会です。運営スタッフを含め9名の医療クラークが参加させていただきました。

当日は、本県のみならず、宮城、秋田、青森の医師事務作業補助者81名が参加しており、職務経験も1年未満の方から10年近い方まで様々でした。当院望月院長、県立中部病院遠藤院長、県立大船渡病院伊藤院長をはじめ、当院の各部署のスタッフから医師事務作業補助者のあり方、医療関係法規、診療報酬、電子カルテ、医療安全、検査、医学一般、感染対策、診断書の作成等についてご教示いただきました。入社して6ヶ月の間に32時間の研修が義務付けられているため、以前耳にしたことがある講義内容もありましたが、入社して6年、加齢と共に忘却曲線が急降下している私にとって、改めて学習できたことは本当に幸運でした。

特に印象に残っているのは、県立大船渡病院伊藤院長の医療安全の講義の最初にあった、「皆さん、医療とは安全でしょうか?」という問いでした。多くの日本人は「医療は安全で当然。ミスはありえない」と思っている。これは、今まで医療に携わってきた医師や各職種の先人たちが、医療を安全に患者さんに提供できるように真摯に業務に取り組んできた結果なのだとことを痛感しました。

今回の研修会を通して、今現在医療に携わっている医師事務作業補助者に求められている医療人としての資質等を再確認でき、また、今後も必要とされる職種となっていくために必要とされる全般的な医療関係の知識を得ることができ、大変有意義な2日間でした。

貴重な休日の中、講師をお引き受けくださった先生方、並びに会場準備等ご尽力いただいた事務方の皆様に感謝したいと思います。

盛岡さんさ踊り

リード太鼓が始まり2クール目から拍子を合わせる。「よし！順調なスタート！割と合ってる！」と思いながらスタートラインを越え踊り始める。前の団体に詰まり、立ち止まったままの踊りで笛の音、鐘の音を聴く。大丈夫。いける。大丈夫。太鼓リーダーは転出された井上先生から木村先生に変わった初めての年、木村先生は緊張の中にも気合十分で太鼓を叩く。

踊りながら右隣の木村先生を見る、順調にリズムを刻んでいる。左隣の三輪先生は!!切れ切れで左右に太鼓を振っている。その隣の垂友美さんは？何時もの様にきれいに踊っている。小坂君は？これまたノリノリで太鼓のばちを操っている。前の踊り代表の3人は？優雅さと華やかさの中に力強さも交えて踊っている。さすが看護部！

望月院長を先頭に副院長、局長、部長、技師長、太鼓、笛、踊りが続く。医局、看護、薬剤、放射線、リハビリ、CE、栄養、検査、情報管理室、委託業者、今この時も勤務をしている方々、そして準備から進行、片付けまで常に支えてくれている事務の方々、すべての人が一緒にゴールを目指す。

昨年、佐々島先生がさんさ踊りは究極の多職種連携？と言っていました。私もそう思います。



最近では糖尿病患者さんが増え、多くの医療機関で糖尿病患者さんと接する機会が増えています。

糖尿病は「一時的な治療ですぐになおる病気」ではなく、「一生おつきあひすることが多い生活に密着した病気」なので、薬の治療以外に、食事・運動習慣の見直しや、糖尿病から起こってくる皮膚トラブルの観察など様々なことに注意が必要になります。

そのため、医師以外に専門の多職種の医療スタッフと連携して行われるのが望ましいのですが、岩手では糖尿病専門のスタッフが少ないため、地域の医療機関で連携する必要があります。

その一つとして、中央病院ではH25年から「糖尿病療養指導チーム」で活動しています。総合診療科の医師と、看護師・薬剤師・栄養士・検査技師・作業療法士・連携室職員の計15名から成り、患者さんへの勉強会である「糖尿病教室」や地域の医療スタッフ向けの勉強会「連携勉強会」を企画しています。薬のことから、血糖測定、食事、運動、合併症、患者さんとの関わりなど幅広い知識を、実際の症例経験を交えて紹介しています。これを地域医療機関スタッフに提供し、患者さんの健康につなげることが目標です。さらに最近では糖尿病患者さんの高齢化もあり、地域の介護スタッフの方の勉強会への参加もみられるようになっていきました。

連携勉強会は年4回、偶数月の最終木曜日に、中央病院4階大ホールで開催しています。参加の事前申し込みは不要ですので、是非ご参加ください。



編 集 後 記

あっという間に一年の半分が過ぎてしまいました。年齢を経れば経るほどに時間の流れは速く感じます。歳をとったという現実と直面する感がありますよね。ま、何はともあれ一年の真ん中の節目であるさんさも終わってしまいました。今年も中央病院は太鼓、笛、踊り合わせて250人余、練習不足は仕事柄否めずも何とかチームとして参加できたと思います。私は笛リーダーとして参加しておりますが、毎年、病院前で入院している患者さん向けに出陣前のお披露目を致します。決して揃っているわけではありませんが皆さんうれしそうに拍手声援を送って下さいます。なかには練習の太鼓がうるさいというお叱りの言葉を患者さんから受けたことも無いわけではありませんがそこは可能な限りお許しいただいて、病院として参加する意義をご理解いただきたいと思います。さてこれからは秋本番です。今年の6月はとても暑かったのですが、梅雨に入ってから特に8月はむしろ寒い気が致します。日照時間が平年の半分以下という記録がニュースになっていましたが、野菜も高騰しこのままでは冷害も心配ですよね。天候が不順だと体の調子も今ひとつで体調を崩される方も多いのではないかと案じます。体調管理に気をつけて日々の診療を行っていきたく思っております。

お知らせ

次回の健康講座は・・・

小児発達障害
-予想以上に多い時代、
どう対応するか-

平成29年11月12日(日)
14:00～16:30
プラザおでつで開催します。
多くの方のご参加をお待ちしております。



岩手県立中央病院

〒020-0006 岩手県盛岡市上田1-4-1
TEL:019-653-1151 FAX:019-653-2528
<http://www.chuo-hp.jp>

ふれあい No.278 平成29年8月発行
中央病院広報委員会

◆委員長 島岡 理

相馬 淳	吉田 朗
吉川 和寛	照井 彰子
下川原 裕見子	城戸 直人
佐々木 貴美子	藤原 綾乃
片岸 久	小笠原 学
岩渕 ひろ絵	大久保 拓也
菊池 莉栄	吉田 奈穂子

「ふれあい」はホームページでもご覧いただけます。